The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評>朝倉直己著「紙による構成・デザイン」
Author(s)	村上, 憲司
Citation	デザイン理論. 1972, 11, p. 99-100
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53641
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評

朝倉直己著

「紙による構成・デザイン」

『紙』が日本人のくらしの中で生きた素材として古くから愛され，生活造形の分野で広く利用されて来たことは，「紙と文化」を通覧してあらためておもいなおされる。と同時に，日本人の紙を自由にいなす細かな手わざの妙に，今さらながら一種のおどろきを禁じ得ない。それにつけても卒直なところ，第三章に紹介される具体的なデザインへのアプローチと作品には，いささか実のなさが感じられ，このへんに，第二章の立体構成の限界を指摘せざるを得ないのである。どうも冒頭からややこしい話になったが，実は，紙を使っての今様のデザイン（パッケージ，カレンダー，ディスプレイ，ダイレクト・メイル，その他）が，どうしたものか，うすっぺらい，ちょっとした思いつきの，いわゆる『デザインもの』に見えて仕方がないのである。もちろん，これらが私たちの日常生活の中で果す軽妙な役割について十分に理解した上でのことであるが——どうも紙と文化の創造力が，何か小手先のデザインというオモチャ的なものにすりかえられてゆくように思われて仕方がないのである。といっても，私はこの労作を決して非難しているのではなく，今日の『紙の』『文化』の限界性を指摘しているまでのことである。

さて，この本の目的は，著者が「序」で明示しているように，紙という素材を使って試みられた『形態研究』にあるのだ。そしてその基本となるアプローチは，かってバウハウスにおいてヨゼフ・アルベルスが試みた方法の展開に依っている。彼は教育の出発点を理論的序説から入るのではなく，先ず物質的材料から始め，その構造と結合関係の問題を研究対象としなければならないとする。それゆえ彼は即成の生産過程を頭から学生に理解させてゆく方法を採らず，最初の段階では実用目的に妨げられないで，いろんな材料（紙，木，金属，セルロイド）による自由な実験的な処理をとおして学生の創造力の育成を計った。たとえば，紙のように平らに置かれるのが普通である簡単な素材を，限られた道具によって，立体や空間に組立てることを要求した。その接合方法も，普通は糊張りであるのに対して，ピンでとめたり，縫合わせたり，さまざまな方法を試みさせ，そのような経験をつうじて，紙のやわらかさや，かたさ，引張りと圧縮とに対する強度といった素材に固有の性質を経験的に体得させ，学生各自の構成能力の訓育に寄与したのである。

アルベルスはともかくとして，著者の形態研究の基本的な姿勢には，形態を，あくまで創造のプロセスをつうじて発見されたフォルムの問題としてとらえ，自からフォルムンクの唯中に立入って，その可能性を問いかけてみようとする積極的な努力が一貫してうかがわれる。たしかに創造という行為の全過程は，いわば，階一階と継起的な諸段階を経て構成される一軒の家のようなものである（パウル・クレー）。また，G・ケペッシュに依れば，造形とは，「形成すること」であり，それは「全体統合化へのダイナミックな段階過程」であり，一つの「造形経験」であることが指摘される。

ところで，この本では，『紙』という限定された素材を使って，一つの「造形経験」が多くの図版と適切な構成指導のもとに，その極意が開陳されている。私は先ずもって，この本が単なる how to 式の片手間の仕事ではなく，相当の年月と材料を整えた上での仕事であることに敬意を表さなければならないと思う。アルベルスではないが，著者も同様，造形とは，先に理論的問いかけがあるのではなく，まさに造形経験の唯中にこそ問いかけるべきだとするのであろう。そしておそらく著者自身，そこに一つの答を体得されたのに相違ない。ただこの本の性質上，無理な注文であることは承知の上のことだが，欲をいえば写真をもうすこし魅力的に撮影・構成できなかったものか。偶然，尾川宏氏の『紙のフォルム』という本を一見したのだが，さすが専門家の撮影・構成したものだけに，単に紙を使っての構成演習のレポートに終わらず，paper-sculptural-form として創造的にとらえているところに魅力があった。本書が「紙による構成」の演習レポートとは思わないが，さらに著者が狙っている創造的なフォルムの形成に向って新しい展開をなされればたいへんすばらしいことだと思う次第である。

大阪芸術大学　村上憲司

物的空間から精神空間へ

人々の精神がこの打算的な社会から解放されるよう、もっとシンプルな生活空間をめざして

atelier live

室内装飾 —— 吉村光商店 ◉ オリジナルデザイン—アトリエライブ

京都市中京区二条通木屋町西入樋ノ口町４６１ ———— 231—４５０１